

昭和五二年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の3朝日ビル401号室 電話(03)261-7079
振替 東京0-58431 労金 東京労金本店 No.50234

購読料 月額 400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

たたかいのなかで討報きく……………2
敵に鍛えられ成長……………3

— 国労甲府駅分会一五年のあゆみ —

どんなに苦しくても闘いつづける……………6
— この仲間たちとならやっていける —

「古典」と現代労働運動……………9
— 「古典」は今でも新しい(一) —

反独占・社会主義の路線が生命……………12
— 社会党大会とその課題 —

向坂逸郎先生を語る

“知は力”を胸に……………17 谷 新一
「先生が死んだのはデマだ」……………18 徳 永 晴 美
先生は国鉄闘争に生きている……………19 今 井 伸
先生から学んだことを若者へ……………20 山 本 順 一
国労、「総学習運動」を開始……………5

旬刊 社会通信

NO. 258

一九八五年三月一日

一九八五年三月一日
(毎月一日・二日・二日 三回発行)

■巻頭言■

たたかいのなかで討報きく

一月二日、私は山梨市駅改札二四時間勤務でありました。各夕刊は一五時四八分の下り電車に到着します。いつもは一通り目を通すのですが、今日（一月二日）はどういうわけか読みませんでした。私たちの勤務は徹夜勤務です。四時間の睡眠の後、再度勤務につきます。午前二時頃、山梨日々新聞が駅に到着します。

しかし、今日は新聞の到着が遅く、「それじゃ本を読もうかな」と、山川均の『社会主義への道は一つではない』を読み始めました。今年も正月から『共産党宣言』を読み、五冊目の本です。

新聞は三時頃到着しました。新聞の一五面には「国労が座り込みへ」、さらに大きな活字で「配転に反発強める国労甲府支部、あすから座り込み」との記事がありました。私もこの闘争に参加するのです。その下に、「社会党左派理論指導者、向坂逸郎氏が死去」との記事が目飛びこんできました。何度も何度も読み返しました。私の頭も、顔も、目も、身体全体から血がぬけたようになってしまいました。

私は向坂先生のことを「大先生」といいます。私にとってたくさんのお話を教わった「大先生」だからです。人間、思想、政治運動を本の中で、直接のお話のなかで教わりました。とくに、『わが資本論』（新潮選書）は決定的でした。この本を読んで、私はいわゆる「資本主義の粕漬け」から眼をさまし、組合運動に全身をぶつけるようになったからです。

私が向坂先生にはじめてお会いしたのは国鉄中央反合研、二回目は山梨県第二回「まなぶ」講演会、三回目は一九七九年八月二七日、労働大学二五周年記念集会です。一九八〇年八月四日と九月七日は、私が集めた古本をもってサインしていただき先生のお宅にうかがいました。そして先生に最後に会ったのが一九八三年一月一六日です。山梨市学習会で先生の書庫を見学に行ったのです。

先生あの笑顔は本当に素晴らしい。なんともいえない笑顔です。礼儀作法も素晴らしい。私たちが参上するときも話をするとときも、また帰るときは最後まで見送ってくれました。杖をつけて私たちにはほほ笑みかけて下さったあの姿が、いまでもまぶたに浮かびます。

向坂先生は毎年夏には松本の扉温泉に行かれました。先生は私に、「行きか帰りに一度代永さんの書庫を見せていただきたいですね」とおっしゃって下さいました。私自身も先生が来られることを心待ちにしていました。しかし、実現できませんでした。

向坂先生には多くの本にサインをしていただきました。最初は『資本論』（岩波書店）、一九七三年五月三〇日です。第二八回国鉄中央反合研のときには、灰原茂雄様にお願いで、「知は力である」とサインしていただきました。最後は一九八四年二月、「人生は面白い」（社会主義協会刊）です。そこには、「代永明夫君 一九八四年二月 向坂逸郎」と書かれております。こうして私は百冊以上もの本にサインをいただいたのです。

今年も家の昭子が先生に年賀状を出しました。どういふことが返事がこなく、家では「向坂先生どうして返事をくれないのかね」と、毎日毎日首を長くして心配しておりました。向坂先生にこんなことを言いました。「父様は九〇歳まで生きていたし、先生も百歳まで生きて下さい」と。

最後のお別れは一月二四日午前一〇時から二時まで、自宅でおこなうとのことでした。私は公休で、甲府駅前で強制配転の座り込みに参加するのです。参上できずじょうに残念です。先生をなくしたことは、日本労働運動、社会主義運動に大きな損失となるでしょう。しかし、私たちも向坂先生にまけないようがんばります。向坂大先生、心からさようなら。

（代永明夫・国鉄労働者）

敵に鍛えられ成長

― 国労甲府駅分会一五年のあゆみ ―

国鉄労働者のたたかひの意義はまことに大きい。国鉄労働組合の日本における役割、そして綱領にみる階級性と戦闘性、大衆的基盤の強さが、敵・独占を恐怖させるからだ。

国労の仲間たちは、独占の「国労つぶし」の攻撃に敢然と反撃を開始した。二月からは総学習運動が全国でとりくまれていた。そして三月一日のストライキへの準備にも着手した。

その国労のなかにあつて、全国鉄労働者の先頭にあるのが甲府支部の仲間たちだ。彼らは一月二日から第一次山梨反行革共同行動を組織、みごとにそのとりくみを成功させた。その秘密は何か。国労・甲府駅分会の機関紙「夜明け」、三百号記念版にみる。国労甲府に学び、彼らに連帯しよう。甲府の仲間たちのたたかひは、総評再生への道を指し示しているからだ。

(編集部)

はじめに

一九八五年をむかえ、反行革統一闘争の条件が広がっています。

私たち国労甲府駅分会の闘争史は、不十分ながら、縦と横の隙のない闘争体験づくりと、それを支える家族ぐるみの職場の闘争体制づくりです。「夜明け」三〇〇号発行を機に全国の仲間たちの御批判を頂戴したいと思います。

一 労・資の常識のぶつかり合い

七〇年マル生から、今日までの攻防は、本質的には、「仕事(業務)優先」「文句を言わず黙って働け」という資本の常識と「労働者の都合が最優先だ」という労働者思想とのぶつかりの連続でした。

私たちの弱点は、敵の「すぎ」「やりすぎ」という、地域的・時間差的な各個撃破を許してしまったことです。

階級対立が尖锐化している職場の闘いを再認識し、全職場で創意・工夫して展開することが求められています。同時に、職場闘争を統一して進める指導も要請されます。

二 一〇数年の闘いの教訓

(1) 努力(改善)したこと

① 組織活動の改善

私たちは、日常の組合活動を目的意識的に改善してきました。

第一に、分会内一二班で、月一回の定例班集を開き、大衆討議の作風、点検・摘発ノートを活用して、日常の問題や諸要求を集会終了後、助役交渉を展開してきました。

第二に、ここ数年間の敵の「すぎ」「やりすぎ」攻撃にたいし、班ニュースが反撃への大きな力になりました。また、毎月七日に定例の分会委員会を開き、各班の現状のつき合

わせをおこない、分会内の到達闘争の努力をしました。同時に、分会委員会だけで結論づけるのではなく、各班にもち帰って討論し、翌月の分会委員会に持ち寄るという作風を確立してきました。

第三に、分会執行委員会の改善です。三役請負を克服し、各部の分担を明確にし、責任をもってやりぬきました。

第四に、学習会・全体集会を一ヶ月おきに月始めに開催してきました。

こうして、第一―第四を基本的なサイクルとして、一人ひとりが討議過程に参加し、大衆討論から大衆闘争へと発展させました。

② 役員・活動家の任務

日常の職場の攻防で、役員や活動家が前に出て激しくやり合う、という場面がどこの職場にもありますが、仲間と一緒に前に出る努力をしてきました。

数年間、激しい敵の攻撃が続き、あきらめが浸透している今日、職場活動家のカマエと献身的な日常活動が、仲間を勇気づけ、反撃への力に転化されます。

③ 統一闘争へ

労働組合の各級機関への分断は、敵の常套手段です。職場の攻防を、分会から支部を通じて事細かに伝え、時には、大衆的な説得活動も展開しました。分会機関紙「夜明け」の交流も大きな役割をはたしました。

(2) 力になったこと

① 学習と交流

一〇数年間のたたかいを支えたのは、「学習と交流」でした。

目前のめまぐるしい攻防に追われがちな今日、系統的な学習活動と企業内の交流、企業を越えた交流が、長期にたたかいつづける組織づくりにつながりました。

② 家計簿は泣いている、実態討論の改善

七六年から始まる「家計簿は泣いている」の取り組みも、ずっしりと力になってきています。

実態討論を通じ、資本主義的な常識を一つひとつ払拭してきました。第一に、資本への責任追及と家族ぐるみの闘争体制づくり、第二に、職場を見る目が変化し、合理化にたいして建前でなく本音から「絶対反対」としてたたかう構えが確立され、第三に、日常的な抵抗闘争に転化されました。

③ 連続闘争への努力

職場段階では、忙しきにかまけてずるずるとたたかってしまいましたが、個々の闘争の方針（目標）を立てて、たたかってきました。

そして、方針にそって全力でたたかい抜き、総括し、前進面・不十分な面をつきだし、次の闘争に引き継いできました。

三 国鉄闘争を軸に反行革のうねりを

私たち甲府駅分会は、五九・二合理化で一五五名中、五三名、八月の橋上駅舎合理化（踏切無人化含む）で四九名が仕事を奪われ、狭い詰所に押しこまれ、当局のいやがらせ

や恫喝に抗し、家族的な団結づくりと組織的な闘争体制を進めてきました。

こうした力は、『合理化は、首切りだ』として過程を精一杯たたかたからこそ、つくりだされたのです。結果的に当局は、遠隔地への強制配置転換を躊躇し、五九・二以降、一〇ヶ月間、一人ひとりの仲間に配転箇所も明示できず、年明け早々、にわかに、協定違反の配転強要を迫ってきているのです。

私たちは、八〇年マル生で、資本・国鉄当局の集中攻撃を受けています。田島さんにたいするねつ造による『不当解雇』も、異常な国鉄の労務政策の下で、しくまれた事実が法廷で暴露され、反撃の組織が拡がっています。労働者は、たたかれば、たたかれるほど、訓練され、組織されます。

一月二日の国労本部・地方本部への要請行動と東京西局長にたいする怒りの陳情行動は、『父ちゃんの首を守る』という、家族の決意と『だまってひきさがれない』という、組合員の闘志が結合され、成功しました。これが二四日・二五日の共同行動の戦線拡大につながったのです。

私たちは、山梨における『反行革共同行動』の実践をつうじ、『たたかえば、たたかっただけのことはある』と確信しています。直接的には、二月一日強行発令を断念させることができましたが、もっとも大きな成果は、反行革の縦と横の戦線拡大につながったということです。同時に、戦線の拡大を支える仲間の意識の向上が勝ちとられました。とりわけ、家族の皆さんの資本・当局への腹からの怒り・行動に胸があつくになります。

全国の仲間の皆さん、国鉄闘争を軸に反行革のうねりを全国各地から組み上げましょう。

(『夜明け』三百号、宮坂 義久)

国労、「総学習運動」を開始

国鉄労働組合が反撃の体制づくりに着手した。日常の諸闘争を強化し、三月一日にストライキをおこなうことを決めた。

さらにわたたくしたちを勇気づけてくれるのは、二月から、『小集団、総学習運動』がとりくまれ始めたことだ。この試みは昨年の第四六回大会で確認されていたもの。規模はまことに大きい。二〇〇名以上の分会、そして各地方本部指定による分会(二、三ヶ所)を対象とするというもの。対象者は約七万名である。

総学習はまる一日を費しておこなわれる。情勢、権利をめぐる報告、国鉄情勢を勉強し、出席者が『どうたたかうか』を論議しようというものだ。私もこの総学習に参加した。率直な意見が述べられていることに、国労の強さを感じた。全組合員対象に総学習をやるという意見も出されていた。たたかいは勉強によってさらに強くなる。

この総学習を国労が『反撃への準備』を開始した大きな一歩として注目したい。同時に、この総学習を契機に、分会を中心とする自主的な学習活動へのとりくみが、総学習をさらに効果あるものとするだろう。

どんなに苦しくても闘いつづける

—この仲間たちとならやっていける—

相次ぐ合理化

私は、甲府駅の労働者ですが、五九・二貨物合理化で職場を奪われ、「過員」者として、強制配転、首切り攻撃を仲間とともに一年間たたかってきましたが、今年の正月明け早々、「二月一日発令」を強行しようとする当局との攻防、また、この間の闘いのなかで学んできたことを報告し、国鉄闘争を軸とする反行革統一闘争について報告したいと思います。まず、国労甲府駅分会の現状についてですが、ご承知のように、甲府駅では昨年二月以降、わずか半年ぐらいの間に、「五九・二」、「橋上駅舎化」、「踏切無人化」の首切り合理化が、強行され一五九名いた労働者が、何と一〇五名も減らされる攻撃を受けました。

甲府駅では、定員として働く労働者より、「過員」者の方が多いと言う状況ですし、実に、分会総数の六〇%、七七名が現在も「過員」として強制配転反対のたたかいを続けています。

また、それだけに敵の攻撃が集中しています。

個人面接の強行

現在、分会の仲間たちに、二月一日発令を至上命令とする西局人事課長を先頭に、突然、現場にのりこんできました。

当局は、一月二〇日「個人面接」、二五日までを「調整期間」、二六日から「内命」そして「二月一日発令」という自分たちが勝手に作った「配転スケジュール」をもとに、支部・分会をまったく無視した個人面接を強行してきました。

仲間が抗議すると、「業務命令」で連行、会場は軍事裁判のような異様なものです。

西局人事課長以下の労務屋六名、駐在運輸長室二名、現場管理者三名などが仲間一人を取り囲み「甲府地区では、働く職場がない」「東京へ配転してもらおう」「配転できない理由を言え」と、まるで犯罪人扱いの、前例もない異常なやり方がおこなわれました。

分会や支部・地本の抗議にたいし、中断ややり直しもおこなわれ、人数も局一名立ち会いとしぼりましたが、「二月一日発令」に向け、現場の個人面接は強行されました。

このなかで当局は、すぐにバレルような「ウソ」や「デマ」をくり返します。

たとえば、「支部は了解している」とか「分会はあなたに配転してもらおうと言っている」などですが、あえて混乱をつくり出し、対決姿勢でのぞんでいるのには、理由があります。

一つは「局は現場まで行って努力したがダメだった」、二つ目は「甲府は組合として、配転拒否をやっている」という図式です。

当局は強制配転そのものと強制配転をやらざるを得ない理由づくりの二つの目的で現場にのりこんでいます。

仲間を信頼しきる

こうした厳しい攻撃に直面していますが、仲間たちは個人面接のなかでもじつに堂々と

しています。

仲間たちの主張で共通しているのは、当局にたいする責任追及です。

「おれたちは、好きこんで過員でいるのではない。仕事をさせないのは当局だ」「二〇年も一生懸命働いてきた仕打ちが東京へ行けということなのか。おれの働いてきたどこが悪いとこなのか言えるものなら言ってみてくれ」「東京へ配転すれば、二度と帰ってこれなくしたのは当局じゃないか」「配転の話をしようにも逃げてまわってきたじやないか」「配転希望調査を一回取ったきりで、今度は一回の面接で終わりか、俺たちを人間あつかいしていないぞ」など、個人面接は責任追及、抗議の場にもなってきました。

私は配転を一方的に強行しようとする当局の恫喝を現実を受けながら、現場の仲間たちは動揺もせず、生き生きと、しかも真剣に、よくたたかいぬけるものだと思わせられます。

全員がテープ録音していますので、自分のテープは、他職場の仲間がテープおこしをします。

家庭の状況、苦しみなども入っていますので、普通なら他人に聞いてもらいたくないというのが常識ですが、仲間を信頼しきっているといえます。

もちろん、こわさ、おそろしさ、動揺や不安もあります。

不安、動揺、悩みの克服

甲府駅分会の職場には、ビラや団結赤旗、三角スイなどが出され、赤い物を見れば飛んでくる助役たちとの攻防があります。

こうした、創意工夫したたたかいは、こわさ・動揺・不安のなかから生み出されています。たとえば、漬物一つをとっても、タルにつけたものがなくなると、「そんなに長くられないんだから、今度は店から買ってくればいいじゃんか」とヒョイと口から出ます。なにげない会話でも仲間たちは家に帰ってフトンに入るともうダメなのか不安にかられ、「発令された夢」で飛び起きるといいます。また、毎日、毎日、「ワッペンをつけてると人事考査の対象になります」とか、あるいは「新しい駅舎にいけなくなりますヨ」と言われると、不安と動揺がいっぺんにおそってきます。毎晩、酒をのんで帰り、おくさんにあたりたりもはじまります。

たたかいつづけながらも、不安・動揺・がんばっていることのおそろしさをも持っています。

私たちは、こうした弱さ、悩み、動揺などを徹底した大衆討議の中で少しずつ克服し団結を深めてきました。だから、仲間たちは、「一人では配転させられていた」「どんなことでも、いっしょに悩み考え、行動してくれる仲間がいたからたたかってこれた」と言っています。

Eさん（四二歳）「本当に仕事なくなってガックリきた。当局にも頭にきたが、もったたたかえば残れたという気持ち仲間についてしまい、両方に頭にきてしまった。だから、班にもあまりなじみせず、運転主任の試験を思いきって受ける気になった。そんな時でも、仲間は、班集会で議論してくれたし、すぐに家にも来てくれた。一〇年以上もいっしょに

働いてきた仲間は、自分の性格まで知っていて思っていることを率直に話してくれた。活動家のSさんが家にくるまで、胃がいたくメシも食えないくらい真剣だったことも知った。女房も、あんな人達と離れない方が良いとも言ってくれ、この仲間とやらやっていけると腹を決めた」と言うように、悩み、動揺、こわさなど、一つひとつを克服し、団結赤旗や、三角スイ、ビラ貼りなど、日常の抵抗闘争を生みだしてきたといえます。

強制配転とのたたかいは、労働者をすばらしく成長させたといえます。この一年間、生活実態討論を中心に、一人ひとりの迷い、不安を大衆討論や企業を超えた交流のなかから克服し、仲間や分會を信頼し、闘いに自信をもった闘争態勢を生みだし、ギリギリまで精いっぱいたたかひ、悔いの残らない闘いの作風が身についてきています。

階級闘争の視点

二月一日発令をもって迫る当局は、仲間の思想、労働者根性を変えることはできていませんが、これからの本場の正念場となります。

敵は行革をやりきるために全力で国鉄改革に力を入れていますが、三項目をはじめ内部の不統一はあるにしても、たたかいつづけている国労に攻撃を集中しています。

私は甲府駅の職場にのりこんだ三塚委員会以降、急速に展開された国鉄攻撃と同じく、甲府駅の大量の過員への強制配転は、たんに、甲府の問題、国鉄の問題にとどまるとは思いません。

また国労は二月一日から第八次統一闘争に入りますのでこれとの結合も考えています。行革による大量首切りの突破口となるか、反行革統一闘争の反撃の第一歩になるかのさかい目にあるといえます。

私たちは、単に攻撃が集中したいへんだからとも闘って下さいということでは反行革統一闘争の組織化も、強制配転、首切りも戦えないと思っています。国労がしっかりとたたかっていくためにも、国鉄闘争を軸とした反行革統一闘争の方針がきわめて大切だと思います。

国労に攻撃が集中しているからとか、総評運動の最後の砦だから守ろう、支援しようというだけでは不十分だと思います。個々の企業のたたかひとしてではなく、階級闘争の視点を鮮明にして積極的に闘いの輪を広げていくことだと思います。個々にガンバッテいる様々な職場の闘いや抵抗、電通闘争や争議団の闘いの苦闘を、国鉄闘争を軸につながり合い、反行革の統一したたたかひとしていかなないと階級闘争を闘っていく力とはなっていないと思います。そして、このなかから、社会党や総評の階級的強化をはかっていくことです。

行革の焦点が国鉄闘争にあるわけですから、私たちにとても正念場のたたかひとなります。それは、同時に敵にとっても同じことだと思います。私たちにとても敵にとっても、国鉄闘争はどちらにもころぶ危険性をもち、まさに危険地帯としての攻防の集中点だと思います。

私たちは、国鉄闘争を軸とした反行革統一闘争にしていくとき、企業をこえた階級闘争として総反撃にうつれる条件がこのなかにあると思います。全国の仲間の皆さんとともに精一杯頑張っていきたいと思ひます。

(『夜明け』三百号より、志村 優)

「古典」と現代労働運動

—「古典」は今でも新しい(一)—

今、日本の労働運動にもっとも問われていることは、労働運動、労働組合の原則を明らかにし、その原則を組合員全員のものとするべく「理論と実践の統一」をはかることである。その一つの作業として、私は古典から何を学ぶか、古典は私たちに何を教えているかを具体的事例に即して考えてみたい。

仲間の不安をつかむ

ある職場、A氏の職場がこの四月、課内移動で一名減にされて、よく残業するようになった。そのことによって組合の動きもパタッと止った。

それ以降、A氏はたいへんな深酒をするようになって、外泊になることもあった。夜九時過ぎに執行委員会が終わってから、電車に乗らず「赤のれん」をくぐっていた。それが彼の処理の仕方であった。

『共産党宣言』には「圧制者と被圧制者はつねに互に対立して、ときには暗々のうちに、ときには公然と、不断の闘争を行ってきた」と述べられている。この指摘は興味深い。公然とたたかっているからといってたたかっているとは言えないのだと思う。

また『宣言』には、「かれらは下級の産業兵として、下士官や士官の完全な産業組織の監視のもとにおかれる。かれらはブルジョア階級、ブルジョア国家の奴隷であるばかりでなく、毎日毎時、機械によって、監督者によって、なかでも製造家たる個々のブルジョア自身によって奴隷化される。この専制は、営利が自分の最後の目的だと明らかに公言するようになればなるほど、ますますけちな、ますます意地きたない、ますます腹立たしいものとなる」とも書かれてある。今の職場で頭にこない人は少ないと思う。彼らは、どこかで、本すじではない不満の解消を計っている。ともかくそれをつかむことではないか。

“この指とまれ”では組織はできない

次に、レーニンが、『人民の友とは何か』で次のように述べている。

「労働者は、自分を抑圧しているものが資本であること、ブルジョア階級の階級にたいして闘争しなければならないことを、もはや見ないわけにはいかない。そして、当面の経済的必要の充足のため、自己の物質的状態の改善のための労働者のこの闘争は、不可避免的に労働者に組織を必要とし、また不可避免的に、個人にたいするたたかいではなくて、階級にたいする、すなわち、ひとり工場内だけでなく、いたるところ、あらゆるところで勤労者を抑圧し、圧迫しているその階級にたいする闘いになっていく。これこそ工場労働者がまさしく全被搾取住民の先進的代表者にはかならない理由である。そして、工場労働者がその代表者としての責務を、組織的な持久的な闘争を通じて実現するためには、なんらかの『見通し』によって彼らを熱中させる必要は、全くない。そのために必要なのは、ただ工場労働者にむかって、彼ら自身の地位を明らかにし、彼らを抑圧している制度の政治経済的構造を明らかにし、この制度のもとでは階級的敵対が必然的、ま

た不可避であることを明らかにすることだけである。」
だから日本共産党のように「展望」・「この指とまれ」式で、モノ取りへの幻想を与えて走りまわる必要はまったくないということが言われている。

生活をバクロする

しかし、「彼ら自身の地位」を明らかにし、「彼らを抑圧している制度の政治経済的構造」を明らかにし、「この制度のもとでは階級的敵対が必然的・不可避的であること」を明らかにすれば充分だ、と言われている。

だから非公然の不満を持っている人に、この三つのことを明らかにすることではないか。たとえば、日本共産党の諸君は指導部につくと、いとも簡単に賃上げができるかのようには宣伝していたが、これもレーニン是否定している。「新しい殺戮」の中で次のように展開してある。

「労働者はあちこちでストライキによって比較的たやすく雇主に譲歩させることができたので、この『経済闘争』の意義を過大評価し始め、労働者の同職組合とストライキとは、いちばん良い場合でも、ただいくらか有利な商品―労働力―販売の条件を守ることでできるだけであることを、わすれはじめた。同職組合とストライキは、恐慌のためにこの『商品』の需要がなくなるときには、助けを与える力がなく、労働力を商品に転化させ、きわめて苦しい困窮と失業とを勤労者大衆の運命にさだめている諸条件を変更する力はない。これらの条件を変更するためには、現代の社会・政治体制全体との革命的闘争が必要である。」

資本主義の運動法則として、恐慌時に「労働力商品」の需要がなくなるときには、労働組合とストライキでは、助けを与える力がなく、失業は不可避的であると述べてある。

日本共産党はしばしば、賃上げで消費力をつけて景気回復を、と甘い幻想を与える。しかし、これもマルクス自身の手になる著作によって打ち消されている。

「だから、資本家と労働者との利害は同一だ、とブルジョア及びその経済学者達は主張する。また事実上そうだ。労働者は、資本が彼を雇わなければ滅びてしまう。資本は労働力を搾取しなければ滅びてしまう。そして労働力を搾取するためには、資本はそれを買わねばならぬ。生産に充当される資本・生産的資本が急速に増加すればするほど、したがって産業が繁栄すればするほど、ブルジョアジーが富めば富むほど、景気がよくなればなるほど、資本家はますます多く労働者を使用し、労働者はますます高く売れてゆく。だから、労働者の状態がかなりであるための欠くべからざる条件は、生産的資本のできるだけ急速な増大である。……中略……最後に、賃労働にとって最も都合な条件は生産的資本のできるだけ急速な増大であるということは、ただつぎのことを意味するにすぎない、すなわち、労働者階級が彼らに敵対する権能、彼らに君臨する他人の富を急速に増加し増大すればするほど、彼らは、ますます都合な条件のもとで新たにブルジョアの富を増加させ、資本の権能を増大させるために労働することを許され、ブルジョアジーによって引きずりまわされるための金の鎖をよろこんで自ら鍛えることを許されるといふこと、これである。」

「賃労働」と資本

ここでは、マルクスは生産的資本の増大が雇用労働者数が増大し、労賃が上がる条件であることを示しているが、その賃上げとてもケチなものだ、と述べている。どうして、そんな考え方になっているのかは、マルクスがクーゲルマンにあてた手紙に明らかである。

「いかなる国民でも、一年間はおろか、二・三週間でも労働を停止しようものなら、たちまちまいってしまふということは、どんな子供でも知っている。また種々の欲望の量に応じる諸生産物の量は、社会的総労働の種々のそして特定の分量を必要とするということもどんな子供でも知っていることである。」

『資本論』と賃金闘争

このことは、『資本論』のなかでは、ロビンソンの生活を通して説明されているが、彼の総労働は、食のためにいくら、住のためにいくら、衣のためにいくらとふり分けられている。

人間の歴史のどんな時代にも、おこなわれてきた社会的な総労働の配分が、私的所有と社会的分業の発達として労働生産物が商品の姿をとる資本主義社会にあっては、商品の価値法則を通しておこなわれるのであって、各生産者は各自の生産物がどれだけ必要か、あるいは不足かは、市場に出して、他の使用価値たる商品と対面してみるまでは、わからない。

「何びとも、他人が買うことなくしては、売ることはできない。しかし、何びとも、彼自身が売ったから、直接に買わなければならぬということはない」（『資本論』）。

すでに単純なる商品交換のなかに、恐慌の可能性が示されている。そして、好況時、繁栄時の価値を上まわる価格は、恐慌時の価値を下まわる価格によって平均化される。それも価値法則を通してであるから、労働者のなかにはびこっている好景気待望論としての「賃上げで景気回復」なる経済学的ロマンチズムは、現場でマルクスを学ぶ学徒としての社青同盟員が論破してゆかなければならない。

資本主義の下にあっては労働力でさえも商品となる。だから、価値を中心として需要と供給によって上下する運動を行う。ただ、この商品の場合には、富の源泉としての、消費によって、なくなるのではなく、新たに価値をつけ加える特徴と、今一つ、その販売条件については、常に相対的過剰人口の存在によってその販売価格が引き下げられる傾向にあるという特徴がある。「出てうせろ、門の外に腹のへった連中が沢山いるのだ、あの連中は低い賃金でも大喜びで働くんだぞ」（『ストライキについて』、レーニン）というわけだ。この失業者のプールは、休みなくおこなわれる資本の競争、「より安く、同一の商品をより多く」によっておこなわれる。このことは分業および機械の使用によってもたらされる。分業が進むのと同じ程度に、労働が単純化される。

だから、労働がますます不満で不快なものとなるにつれて、競争が増加し、労賃が下落する。また、機械は手労働を追い出し、労働者を少数ずつあるいは大量に解雇してゆく。したがって資本の競争は、「誰が最も多く産業兵卒を除隊しうるかの競争」（『賃労働と資本』）となって現われる。

（つづく・兵庫F）

反独占・社会主義の路線が生命

— 社会党大会とその課題 —

「教条」を知らずして批判するな

「ニュー社会党」、だれがいいだしたのかは知りません。しかし、「ニュー」ということによって、社会党が四〇年のたたかいのなかで築き上げてきた理論が、「教条」という悪しき批判のなかで葬られようとしています。こうした状況下にあるだけに、私は日本社会党第四〇回大会（一九七七年二月）での故成田知己委員長のあいさつが再びよみがえってくるのです。

故成田委員長の発言はこういうものでした。

「（略）党全体の理論的・思想的水準の向上を

次に、今日の保革接近の政治状況のなかで、党の政策立案能力の飛躍的な強化充実がはからねばなりません。（中略）

教育とか学習とかいえば、せいぜい若い活動家の養成手段にすぎないと考えられがちですが、支配階級の権力をおとしての知的・道徳的影響力と闘って広範な国民の支持を獲得していくためには、党自身、支配階級の最高の知的代表と対抗し、それを克服する能力をもたなければなりません。総選挙で、自民党批判票をわれわれの側に結集できなかった大きな原因のひとつも、ここにあるのではないのでしょうか。

最近、党の学習活動が全国的に活発になってきていることは喜ばしいことだと思えます。若い活動家の諸君が学習にはげんでおられることは、党の将来に明るい希望を与えているのだと思います。もちろん、若い諸君が学習の初期において、いわゆる教条的だと批判されるような言動に出る場合もあると思いますが、それは学習をかさね、運動経験を増すことにより克服されていくのであり、そこに真の成長があると考えるものであります。もし、自ら教条を学ばず、教条も知らず、真剣に学んでいる若い活動家を教条的だと批判する者があれば、これはまったく救いがないと思います。（以下略。傍点は筆者）。

ちようど「協会・反協会」攻撃が吹き荒れる前夜の発言です。

「社会党改革」の真のネライ

こんにちの「党改革」、つまり「ニュー社会党」の路線は七七年の「協会・反協会」攻撃に端を発しています。当時、私たちがこの問題をどうとらえていたのか。日本社会主義青年同盟北海道地区本部第一六回大会（一九七七年一月二日～三日）で決定された方針（「大会の課題と任務」）にみてもわかります。

「社青同の全ての同志に訴える——反独占・社会主義、マルクス・レーニン主義の旗を、より高く、大胆に、確信をもって掲げよう——」

（略）社会党中央本部は、先の参議院選の結果を敗北だと総括し（われわれは善戦した）党改革を柱にすえて長い討論を行いながらも、（一九七七年）九月末、第四一回大

会会で『参議院選挙中間総括』『当面の党改革についての方針』を決定した。新役員（中央執行委員長）は決定できずに統開大会（一二月）まで暫定的に成田・石橋体制で継続することになった。

社会党改革問題について（独占資本の意図を代表し）マスコミは『協会』対『反協会』の対立とか、『左』右の勢力争いなどと書きたてているが、決して問題の本質はそこにあるのではない。

反独占・社会主義、『日本における社会主義への道』『新中期路線』『国民統一綱領』をはじめ、日本社会党の路線と党全国大会で決定された方針で、全党・全党員が『統一と団結』することは社会主義政党、階級政党として当然のことである。

であるからして、私たち社青同の立場は明確である。反独占・社会主義の日本社会党、社会主義政党・階級政党としての路線と方針を支持し、また指導を受けて成長していきたいと考えています。このことはいかなる困難があっても変わることはないと思います。

ですから、社会党の階級性を抜き取り（弱める）、改良主義、社会民主主義Ⅱ体内、政党化をめざす独占資本の動きや一部労組幹部をも含めたいかなる攻撃をも許さないし、青年政治同盟として党を守る先輩と共に立ちあがる決意です。

しかし、九月、第四一回定期大会で決定された『当面の党改革についての方針』や『国会議員等の全国大会代議員資格附与に関する決議』等は、社青同（党規約に定める支持団体として）として、多くの不十分な点や疑問点・問題点があることを指摘せざるを得ない。十分なる同盟内討論をくり広げるなかから率直なる問題点を、党機関（党支部・総支部・道本部・中央本部）に反映させていかなければなりません。同時に、社青同支部と党支部・総支部、地本と党道本部との話し合い、定期協議で意見交換を深めながら問題点の解明をはかっていく必要があります（傍点は筆者）。

一九七七年の「七夕選挙」といわれた参議院議員選挙の総括（結果）に端を発した、「社会党改革」の本質は何であったのか？

すでに、当時から七年四カ月を経た今日ではあるが、この論争をまじめに振り返って見ること（「新宣言」の決定にともない「綱領」と「道」は党の歴史的文書とします？）はたいへん重要であると思う。一九七七年九月におこなわれた社会党第四一回大会は、このとき「当面の党改革についての方針」を次のように提起していたからです。

「一 社会主義協会について（抜すい）」

社会主義協会（以下協会）は理論集団を逸脱しているとの満場一致の確認にもとづき、党や労組との関係を正常化するため、次の措置をとる。

1 協会組織機構・運営について

2 今後の改革手続と保証について

二 党改革の八項目課題について（抜すい）

1 党風刷新委員会の設置

2 党内派閥の解消

3 『日本における社会主義への道』の再検討について

① 『道』については、新中期路線と国民統一の基本綱領をふくめて、党の長期路線

を情勢の変化に対応させるため、今後それらを創造的に発展させていく。

- ② 再検討にあたっては、①若年労働者の結集、②要求の多様化に対応、③共同戦線党的性格の明確化など考慮する。
- 4 党内民主主義の確立と少数意見の尊重
- 5 革新政策の研究体制を確立する
- 6 党の教育機関を常設する
 - ① 総評など各団体の協力をえて、党独自の学校を常設する。
 - ② 労働大学は、独立した教育機関であることを確認し、党委員長の学長就任、補助金交付、「まなぶ」の党機関によるPRなどをやめる。
- 7 政権プログラムを明確化する
- 8 青年対策の強化

① 現在の社会主義青年同盟とだけの支持協力関係をもつのではなく、社会党を支持する複数の青年組織の協力関係を平等に結び、将来統一をめざす。

② 援助金、規約上の支持団体関係は、各青年組織と平等にもつ」
 このように「当面の党改革についての方針」では、「社会主義協会の規制」「『日本における社会主義への道』の再検討」「党の教育機関の常設」「社青同・階級的青年運動の排除、青年運動複数論」、「国会議員等の党全国大会代議員無条件附与」等々が出され、今日まで、それはとりもなおさず日本社会党が反独占・社会主義をめざす階級政党としての路線を堅持するのか、社会民主主義の体制内党に転換するかどうかをめぐる激烈な党内論争・路線論争の歴史（七年四カ月）でもあったわけだ。

ですから一九七七年以降今日までの経過を見ての通り、一九八〇年一月、社公「連合政権」構想合意、「党改革」の決定事項である「道」と「綱領」の調整をおこなうとして「八〇年代路線」中執原案、「社会主義の構想」と矢継ぎ早に提起されてきました。

そして、そのゆきつく先が「ニュー社会党宣言」（八五年一二月大会・予定）とされているのです。

重大な思想・路線の後退

一月一七～一九日、東京・日本教育会館で社会党第四九回定期大会が開かれました。大会では、「行革」・国鉄合理化、原発方針の転換、そして「道」の歴史的文書棚上げ問題などをめぐり活発な討論がおこなわれました。大会をつうじて反行革・国鉄闘争が党の当面の最大の課題であること、そしてその闘争をつうじて科学的社会主義の路線の堅持・強化がいよいよ重要になっていることが明らかにになりました。

「今日、中曽根政権は戦後政治の総決算として行革攻撃をかけている。国鉄労働者攻撃を中心に大量首切り、三項目を労働者につきつけ、職場の抵抗、リボン闘争へきびしい攻撃を加えている。首切り攻撃とたたかう社会党、ここでごんばっている黨員の姿を見てやっぱり社会党はたたかっていると信頼をちとっている。ある国労地本青年部のアンケートでは千四百四十人中八五・七%が社会党支持であった。これは合理化とたたかっているからこそ社会党へ支持があるのだ」（社青同）。

「国鉄の今の職場に民主主義がない。二二兆円を独占がくいのにしてきた結果にある。社会党こそ全労働者の的なのだ。分割・民営化と全力をあげてたたかうことだ」「二五歳の新婚間もない青年が職場抵抗でつばかけたとデッチあげられ首を切られた。国鉄を中心にたたかうことだ」(福岡)。

反行革・国鉄闘争と同じように反原発の大衆闘争を通し、生活から党の政策転換にたいし修正がされたことが今大会のもう一つの重要な点です。

二二県本部、三県一〇人の代議員による修正案(「稼動中の原発については、安全性が確認されていないので、運転中止を求める闘いを強化します」)は党派をこえたものであり、それだけに現地住民、労働者の大衆基盤に立っているものでした。

「中期社会経済政策」については、この「政策」は、「二%以下の完全失業率」や「財政危機」「海外投資」を現実にある問題として認めるようになっていきます。

労働者にとってもっとも敵対的性格をもつ技術革新⇨合理化にたいして、「政策」ではこう述べています。

「中期社会経済の対象期間に必要とされる社会的ニーズを充足し、かつ財政上の危機を克服していくためには、この期間に年率五%程度の成長が必要」「労働の人間化を含む社会問題の解決のためにも、福祉社会の形成のためにも、また潜在成長を維持するためにも、技術革新の推進は中期社会経済政策の対象期間中の最大の課題の一つとなる。国はこのような技術革新の進展のために基礎的な研究開発を中心に積極的な支援を行わなければならない」

これでは「行政改革」は順風満帆の勢いで走ってしまうこととなります。

このように、重大な問題点があるなかでも、「中期社会経済政策」にたいする追及・批判も不十分でした。結果として、承認されています。

組織・財政・機関紙小委員会のなかでは、特徴的な点として、「労働運動局」の方針にたいして活発な討論がされました。

「現在、各職場では『社会党は合理化に反対する声を拾ってほしい』との声が強い。大会方針はこの声に応えていない」(千葉)。

「ME・OA化絶対反対の立場でたたかわなければダメだ」(兵庫)。

「労戦統一は、『全的統一』と理解している。大会方針は反独占・反合理化の視点を明確に」(福岡)。

「国鉄労働者への連帯の視点を明確にしてほしい」(長野)。

「反行革を運動の柱にせよ。国労などとの連帯が不十分な限り、本当の労戦統一はできない」(福島)。

これらの質問にたいして労働局長の答弁は次の通りである。

「ME・OA化など技術革新と反合理化を切り離すべきだ。新技術の導入には『労働者の参加』が不可欠。行革については、財界主導ではなく、国民の立場に立った行革を求めていく。」

全労協には私鉄総連が入っているし、電々、専売が民営化されれば加入する。だから、全労協は『同盟に近い』というより、むしろ総評に近いのではないか。反独占・

反合理化については、党の基本的な立場であるため、大会方針の中では具体的な問題に絞った。また社会党ほど国鉄問題に真剣な党はない」

労戦統一問題、右翼的労戦統一反対、総評の再生をめざしたたかっている全国の活動家にとって、「全民労協」の本質はすでに明確であり、反合理化統一闘争をめざす代議員の真剣な質問にたいしてまったく無知といわざるをえない認識の答弁に、あらためて職場・地域で労働運動の強化、首切り反対、反「行革」統一闘争の前進に向けて努力していかねばならない。

青対方針については、各県本部の青対運動を担う代議員、社青同代議員をはじめ多くの討論がされました。

①青年の共闘運動は拡大しているし、それを指導している社青同との支持協力を明確に、②組織検討委報告は青対機関としての討論を否定している、③反独占・反行革を柱とする青対運動の提起を、また全国の運動を集約せよ、という意見が多く出されました。

しかし、青少年局長の大演説的な答弁のなかには、十分に活かされませんでした。反独占の青年戦線の構築に向けて、社青同を中心に、今後とも社会党のまわりに数多くの青年を集約させていかなければなりません。

「綱領」と「道」について、歴史的文書とするという提案にたいしては、修正案と反対の意見が数多く出されました。

この間の「社会主義の構想」の党内討議をふまえ、圧倒的代議員が党内民主主義を含めた党中央の運営、そして「構想」自体に対する批判を集中しました。

「党内民主主義に問題がある。『構想』の下部討論をやってきたがどういう結果であったのかの報告がない。原本の討議で一八人中一六人が『構想』に反対」（千葉）。

「『道』を歴史的文書にすることに反対。一〇月中央委と矛盾する。規約第百条の問題がある。『構想』は全党的な集約になっていない」（社青同）。

こうした意見が続出したあと「『新宣言』は党の歴史を踏まえ、作成したい。全党一致で決定できるように、最大限の努力をする。下部討議も民主的に保証する。『綱領』『道』を歴史的文書とするのは、『新宣言』を採択したうえである」（田辺書記長）とあいまいな集約がされました。

したがって論争点、党の基本路線をめぐる論争は次期大会まで最大の課題として残されたということです。

ニュー社会党、現実路線、政権を担う党へ……といいながら、なしくず的に社会民主主義の党へ変質することは断じて許せません。

反独占・社会主義、日本社会党の階級性を堅持するために奮闘しよう。（北海道・M）

向坂逸郎先生を語る

“知は力”を胸に

谷 新一

一月二十二日の朝、向坂先生が亡くなられたことを先輩から知らされた時、私の脳裡をかすめたのは、もう十数年も前、S鉄道の間と先生のお宅の一室を借りて、月一回開いていた学習会での、屈託のない先生の笑顔でした。

同じ敷地に住んでおられる和氣先生を囲んでの学習会。始まってから三十分ほどすると、母屋の方から下駄の音が聞こえて、和服姿の先生が「お、やってるな」と様子を見に来られました。何も言わずに黙って、一人ひとりの発言に耳を傾けられ、ちょっとあやふやな発言があると「それはどういことかね」と必ず質問されました。私たちは、その質問に全神経を集中して答え、「それでいい」といわれてホッとしましたものです。そして、読書、絵画、世相と話題は幅広く広がりました。

一年余り続いたこの学習会で、私は多くのものを学びました。なかでも、先生の質問への全神経の集中は、「何事もまず自分で判断して自分で結論を出せ。主体性を持って学習しろ」ということを私に教えてくれました。

先生が亡くなられて一週間後、日本武道館で、闘う八五年、減税・時短・賃上げ要求実現総決起集会が、労働四団体と全労協の主催で開かれました。明るく、暖房の効いた会場で私たちを迎えたのは、ニューラテン音楽とかの演奏と明滅する、赤・青・黄のライト、整然と並べられた椅子の間で取材するテレビカメラでした。労働歌も林立する赤旗もない管理し尽くされた集會に、ア然とする総評からの参加者。全労協の行く末を思い知らされる一方で、右翼的労戦統一反対の決意を再度固める集會でした。

先生が亡くなられた日のある夕刊は「一つの時代（マルクス主義？）が終わった」と報じました。しかし、マルクスが解明した資本主義社会の矛盾は、臨調行革路線を柱とした政治反動と軍拡、労働戦線の右翼再編、ますます苦しくなる労働者の生活として拡大しています。「資本主義は変わった」といわれる「偉い」先生もいますが、職場から見れば、資本主義の本質は何も変わっていないのです。

先生の死によって、私の頭の中にはいま、先生と一緒に学ばせて頂いた思い出とともに、社会主義社会実現への意志が、これまで以上に、しっかりと息づき始めました。

“知は力である。”——私の部屋に掛けられたこの色紙は、今後もたゆ間なく続けたたたかいに、大きな確信を与えてくれています。

（私鉄労働者）

先生が死んだのはデマだ

徳永晴美

一九七一年夏、私がたまたま総評に立ち寄った時、モスクワから帰国したばかりのM君に出会った。彼は私に、「向坂先生の電話番号、知りませんか？一度会いに行きたいんですけど」と言う。「お前なんかにあんな偉い先生が会うわけないだろう！」——これがその時の私のセリフであった。お恥ずかしいことに、これが当時の私の「常識」であり、認識の程度であった。

それから間もなく、偶然に通訳者として初めて向坂先生にお目にかかる機会を得た。「叱られないように」ということばかりを気にして、生きた心地もせずに通訳をしていた当初のことを今でも思い出す。青年であった私の中には「偉い人は怖い人」という観念がはびこっていたのだ。

ところが、先生がこちらを見つめる目はとても「可愛かった」のだ。私がうら若き青年であること、そして先生が愛し支持するソ連のことばを話すことに対する親しみが表情に表われたのかもしれない。後で分かったが、この優しさは、特に青年や子供を見つめる時の先生に特有のものだった。「レーニンもそうだったな」とよく思ったものだ。

怖い人じゃない、と分かった私は急速に先生に親近感を覚え、時にはぞんざいな言葉を使うようになっていた。目の前で先生を「爺さん」と呼んだこともある。前立腺肥大を病んだ直後の先生に「シヨーベンは出ますか」とたずねたこともある。そのたびに爺さんは一瞬応答にうろたえていた。「まともに答えるか、カミナリを落とそうか考えていたのかも知れない……」

爺さんが家にテレビを置かない主義者であることを聞いて知っていた。ある時、遊びに行つて「労働者階級の圧倒的多数がテレビ中毒にされようとしている現代社会においては、いかに彼らがくだらん物を沢山見せられ、それによっていかなる情報が与えられ、いかなる思想を持たされようとしているかを直視するには、向坂逸郎もテレビを買うべきである！」と説得したい誘惑にかられた。が、話しがそこにたどり着く前に、ボーリングとはそもそもどんなスポーツか、バーやクラブのホステスはどんなことをしているのか、という類の質問攻めに会い、「若くて美人のホステスは銀座なんかで高い金をもらっているが、そのうち年貢を重ねるとともに美の商品が低下してくると、先生の住んでおられる鷹宮あたりのどうでもいような小さなバーなんかに流れ着いて来るのであります、はい」とかなんとか、怪しげな、資本主義下におけるホステス人口移動説を理論付けするようになってしまい、ついにテレビ論争は不成立となってしまった。その時の私の下らぬ駄話を先生はやはりニコニコして聞いて下さった。こうして沢山のひとと会い、新聞・雑誌を丹念に読まれる先生には、情報源は十分であったのだろう。

向坂先生は確かにもう亡き人となった。しかし、ここで私は考えた。「扇動的な死」というものが存在する、と。先生が亡くなったという知らせを受け多くの人たちが、今まで以上に結束を強め、師の思想実現の誓いを新たにしている。死が新たな呼びかけとなった

のだ。死が精神的・物質的な力を多くの人びとの心の中に息づかせているのだ。自分の信念に合致しないことを耳にすると先生は「それはデマだ！」と頭ごなしに怒鳴った。私も言いたい——「先生が死んだというのはデマだ！」。

先生は国鉄闘争に生きています！

今井 伸

積雪は軒につかえ、ことのほか寒さが厳しい、吹雪の朝、電話で向坂先生の訃報を聞いた。何とも言えない悲しみに襲われ、精神的支えというものを実感した。浅学な私は、文字どおり、勉強がきらいであった。私は労働運動を通じ、教科書や先生を得たような気がする。学んでたたかい、たたかつて学ぶことのこれからの私たちへの言葉であろうと思う。向坂先生と初めて会ったのは、国労秋田地本の専従をしていたときで、先生宅へおじゃまをして、資本論を頂いたときであった。

その後、国労本部専従となり、たびたび自宅へ伺い、国労運動の現状報告をしたり、学習会へ参加をした。何時も笑って「君たちは必ず勝つよ」と言われたものである。

先生は、厳しいといわれるが、職場で苦闘する私たちにはやさしかった。労働運動、職場闘争に基本を据え、実践を重んじる先生は、やられても、たたかれても、たたかい続ける私たち職場活動家には必ずぬぎらいの言葉をかけてくれた。その辺の評論学者とは違い、職場の仲間たちの気持ちや、気分を大事にし、たたかいと深くかわり、学習とかかわる。労働運動、社会主義運動は人間をつくるというのが向坂先生の信念だったと思うし、何よりも、現場労働者を信頼していた。マルクス・レーニン主義の理論と実践の統一、正しい理論の根底はここにあるように思われる。その先生の姿勢と顔に汗して働く私たち労働者が自らの手で未来をひらくため、団結を求めて職場を大切に、労働者を信頼する日常的な活動することと一致するのは当然である。

その現在と未来を担う活動家づくりを重視し、たたかひの経験の交流、学習に質的に交って頂いたのが向坂先生であり、マルクス主義の原則的な思想であると確信する。その先生は亡くなられたが、私たち職場活動家のなかに向坂逸郎先生その人とその業績、マルクス・レーニン主義は引き継がれ、生きつづけている。学習・交流・討論・総括の力をふりしぼって首切り阻止のたたかい、資本主義とたたかい続ける現場の実態を無視する人々に一つの時代は終わったと言われるすじ合いはない。いま、国鉄闘争は重要な時期を迎えている。「国鉄再建」という名のもとに首切り、大量解雇を実行されようとしているからである。私たちを切り売りするような政策論議にうつつを抜かしているときではない。事業拡大、競争の原理を打ち出すことは、現場労働者をきずつけ、働く誇りを奪うことである。

国鉄が破壊され、生活苦に追い込まれる勤労大衆の要求と、私たち国鉄に働く労働者の生きる権利を守る、一人の首切りも許さないという政策を打ち出し、抵抗し、この社会とたたかい続ける組織づくりをかち取らなければならぬ。人の生命を大切にすることに集約される唯物弁証法を根幹とする歴史観、科学的社会主義をたたかう道、具体的実践のまとめであり、すべてである法則を学び、具体的たたかひに結びつけていく労働運動、反合理化闘争の強化を先生は、私たちに投じてくれたのである。

先生といっしょにまんじゅうを食べたときを思い出すが、確か一昨年秋だったと思う。私に「大局を見る目と細心の集中力が必要だね。大いに勉強なさい」と言われた。その言葉をしっかりと、かみしめて私は職場でたたかっている。先生は国鉄闘争に生きていく……。

(国鉄労働者)

先生から学んだことを若者へ

山本 順一

向坂先生にはじめてお会いしてから、すでに三十年近くなる。先生は数年前から、お身体を悪くされ、長時間のお話はよくないのではないかと考えて、お訪ねすることを遠慮していたが、それでも機会をみてお伺いした。

先生はもともと、人なつこい方で、期日がせまった原稿をかかえて、執筆されているときなどでも時間をさいているとお話し下され、私たちがむしろはらすることが多かった。そして、時間が経つのを忘れてご迷惑をお掛けすることになった。それはお身体を悪くされてからもつい続いた。

先生にはこの三十年の間、私はもとより家族ぐるみでご迷惑をお掛けし、ずっとお世話話になり続けであった。そんな先生に何もお返しすることなくお別してしまったことを大変申し訳けなく思っている。

しかし、先生は人の世話がお好きなようなところがあった。選択に困って先生に判断を迎ぐようなことは好まれなかったが、決心してお願いに行くと、必ずや世話をして下さるし、それも徹底して下さった。それでいて、お返しを望むようなことは毛頭ない方なので、それが今私たちにとって救いである。

学問上のことや社会主義運動のことについてよりも、私は先生から絵や文学、さらには人間の生き方の面で大変多くのことを学んだ。それらは先生が私に教えるというのではなく、先生との雑談のなかから私が学んだものである。

先生のような偉大な方と私はこれまでお会いすることがなかったが、これからもないように思われる。それほど私にとって大切な方である。そして先生とお会いしてお世話になったことを誇りに思っている。

何かの時に先生が「人はあれもこれもできるものではない。自分が好きで選べば、それを一生懸命やればよい。若し、成功しなければそれでよいのではないか。一生懸命やれば生活などは何とかなるものだ」と言われたことがあった。

この言葉も私は今尚大切にしている。そして、学生諸君の就職について私は時々、この言葉を使わせて頂いている。

しかし、先生がこのことを言われるのと、私が言うのとは同じ言葉でも違うように思われてならない。

私は先生から学んだことを、私のものにして、先生のようなことはできなくとも、若い人々に少しでも役になれるような自分になりたいものである。それが先生に対する私のせめてものお返しである。

(経済学者)